様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６年　６月１２日現在

機関番号：２１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０２３６

研究課題名（和文）へき地にある小規模病院等で行う地域包括ケアシステムに関する看護学実習モデル開発

研究課題名（英文）Development of a Nursing Practice Model Related to Community-Based Integrated Care Systems for Small, Remote Hospitals

研究代表者
遠藤　恵子（Endo, Keiko）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：００３１０１７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：小規模病院における地域包括ケア実習の現状と課題を、実習指導者と教員双方の立場から明らかにした。実習指導者は、地域で生活する人々の健康を支える看護に強い誇りをもちながら学生に指導していた。教員は、地域包括ケアにおける能力を学生が実習で獲得できていると認識していた。これらの結果から、患者の生活をこれまでの人生と今後の生活の視点でとらえることと、実習指導者の経験に応じて大学から支援することを要素とする、地域包括ケアシステム構築の実践活動を目指す看護学実習モデルが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高齢化社会において、地域包括ケアシステムを構築できる能力をもつ看護師養成が喫緊の課題である。高齢化や過疎化の進んだ地域で地域包括ケア構築に取り組む小規模病院の実習指導者と大学教員を対象に調査を実施したことで、実習を依頼する側と受け入れる側の双方にとって実施可能な、質の高い具体的な実習指導の方向性が明らかになった。実習施設の確保、ひいては地域包括ケアシステムを構築できる能力をもつ看護師確保に寄与できる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified, from both instructor and teacher perspectives, the current situation and challenges of community-based integrated care practice conducted at small hospitals. Instructors taught students with a strong sense of pride in nursing, which supported the health of community residents. Teachers recognized that students had acquired the competencies necessary for community-based integrated care through practice. Findings from this study revealed a nursing practice model aimed at implementing practical activities to establish community-based integrated care systems. The model involves viewing patients’ lives through the lens of their past and future lives and involves receiving support from universities according to instructors’ experiences.

研究分野：看護学

キーワード：看護学実習　地域包括ケア　小規模病院　実習指導

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

高齢化が進み、公共の交通機関が少ない地域が増加している。このような地域の住民の健康を守り、自分らしい暮らしを住み慣れた地域で人生の最後まで続けることのできる社会をつくるためには、地域包括ケアシステムの構築が必須である。高齢化や過疎化の地域の増加が予測される社会に対応できるよう、地域包括ケアシステム構築の実践活動を目指す看護師の養成が喫緊の課題である。

看護系大学生が卒業時に身につけてほしい地域包括ケアにおける能力として、「あらゆる視点で見る力」「協働できる能力」「発展的思考」などが挙がっている[1)]。また、過疎地にある医療機関の看護職は、文化や制度を理解した実践能力が求められる[2)]。

看護学教育では実習が重要な意味を持つ。看護系大学 4 年生は、地域包括ケアシステムの必要性は認識しているが、対象者を地域での生活者としてとらえる視点が不十分である[3)]。この視点を獲得させるには、十分な指導体制の中で地域包括ケアに重点をおいた看護学実習が不可欠である。

高齢化が進み、公共の交通機関が少ない地域では、大規模な医療機関は少なく、規模の小さな医療機関が地元住民の健康の砦となり、住民の健康を守る看護を提供している。地域包括ケアシステム構築に関する看護学実習を強化のため、学士教育課程の教育内容を満たした内容や指導体制のもとで実習指導ができる小規模病院を十分確保する必要がある。

地域包括ケアシステム構築が実践できる看護師の養成は、自分らしい暮らしを住み慣れた地域で人生の最後まで続けることができる社会の実現に向け、高齢化がすすむ地域にある小規模病院で地域包括ケアシステム構築の実践活動を目指す看護師の養成と、看護実践の質の向上に寄与できる。

２．研究の目的

（１）看護系大学の実習を受け入れた、地域包括ケアの視点で看護を実践している小規模病院の実習指導者の体験を明らかにする。
（２）小規模病院における地域包括ケアに焦点を当てた、看護系大学の看護学実習の実習のコアとなる実習内容の特徴を明らかにする。
（３）地域包括ケアに関する実習が充実強化されるための、大学と小規模病院で活用できる実習支援ガイドを検討する。

３．研究の方法

（１）看護系大学の実習を受け入れた、地域包括ケアの視点で看護を実践している小規模病院の実習指導者の体験を明らかにすることを目的に、以下の方法で調査を行った。
①　対象　地域包括ケアシステムの視点の実習を受け入れている、東北地方にある看護系大学の実習施設となっている小規模病院等の指導者や管理者
②　調査内容　地域包括ケアシステムに焦点を当てた実習を履修した卒業直前の学生から、地域包括ケア実習で学んだことやもっと学びたかったことを自由に語ってもらった。この語りを参考に実習指導者を対象とする面接ガイドを作成した。面接では、施設が看護学実習受け入れの検討段階から、実習準備、実習中、実習後までの間、実習指導者や管理者の体験について語ってもらった。実習指導者や管理者の体験とは、看護系大学の看護学実習を受けいれる検討段階から実習中、実習後までの間に、実際行ったことや考えたこと感じたこととした。
③　データ収集方法　小規模病院の管理者に文書で依頼し、実習指導者の紹介を受けた。紹介してもらった実習指導者に文書で依頼し、文書で研究協力の同意を得たのち、一人 30 分程度の面接を行った。
④　分析方法　面接内容は録音し逐語録におこし、帰納的に分析した。
⑤　倫理的配慮　山形県立保健医療大学倫理審査の承認を受けた。(承認番号 1901-29)

（２）地域の強みを活かした小規模病院における地域包括ケアに焦点を当てた、看護系大学の看護学実習の実習のコアとなる実習内容の特徴を明らかにすることを目的に、以下の方法で調査を行った。
①　対象　看護系大学において、小規模病院における地域包括ケアの実習を担当している専任教員
②　調査内容　地域包括ケアに関する実習の教育課程における位置づけ、具体的な実習内容や実習指導体制、実習するうえで工夫している点や課題
③　データ収集方法　小規模病院で地域包括ケア実習を行っている看護系大学をインターネットで検索したが見つけることができなかった。このため、知り合いを通じて条件に合う看護系大

学教員を紹介してもらった。紹介してもらった教員に文書で依頼し、文書で研究協力の同意を得たのち、一人30分程度の対面またはオンラインで面接を行った。
④　分析方法　面接内容は録音し逐語録におこし、「あらゆる視点で見る力」「協働できる能力」「発展的思考」の視点で、具体的に行っている実習内容を分類した。
⑤　倫理的配慮　山形県立保健医療大学倫理審査の承認を受けた。(承認番号2301-29)

（3）地域包括ケアの視点で看護を実践している小規模病院の実習指導者の体験と小規模病院における地域包括ケアに焦点を当てた看護系大学の看護学実習のコアとなる実習内容から、地域包括ケアに関する実習を充実強化するための、大学と小規模病院で活用できる実習支援ガイドを検討した。

４．研究成果

（1）小規模病院等における地域包括ケアに関する看護学実習指導者の体験
①　実習全体を通じた体験
5施設17人の面接調査から、小規模病院等での地域包括ケアに関する実習指導者の体験として、【学生の居場所を確保する】【病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい】【学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認する】【安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す】【指導者を中心としながら看護師全体で協力する】【期待される指導責任を果たすことに不安がある】【よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善する】【実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む】【実習指導の経験で看護の質が向上する】の9つのカテゴリーを抽出した。(表１)

表１　小規模病院等での地域包括ケアに関する看護学実習指導者の体験

カテゴリー
学生の居場所を確保する
病院の幅広い活動や自分たちの看護を知ってほしい
学生が関わることで変化する患者の感情や体調を確認する
安心できる雰囲気の中で、学生の気づきを引き出す
指導者を中心としながら看護師全体で協力する
期待される指導責任を果たすことに不安がある
よりよい指導を目指し実習内容や方法を改善する
実習目標が達成できるように大学と一緒に取り組む
実習指導の経験で看護の質が向上する

小規模病院の実習指導者は、自分たちの看護を、自分の仲間と考える学生に知ってほしいと強く思っていた。指導の際は、患者の生活や健康に配慮しながら、患者と学生の双方を尊重していた。実習指導は、少数しかいない実習指導者に負担がかかっているが、病院の管理者や他の看護師と協力し、さらに良い実習を目指したいと考えていた。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の看護学実習ガイドライン[4]では、実習指導者は、対象者の状態に関する臨床判断を説明し、適切な看護ケアの技術を示して学生を導き、対象者と学生との関係形成を支え、プロフェッショナルとしての姿勢を示す等、 看護実践者としての役割モデルとなることを期待している。本研究対象となった小規模病院の実習指導者は、患者を尊重しながら、在宅医療や地域包括ケアに関するといった社会に求められている看護を実践しプロフェッショナルとしての姿勢を示していた。
実習指導は、指導者の看護の学び直し、院内教育への活用といった小規模病院にとって看護の質の向上という利益をもたらしていた。実習指導によって自施設が社会から評価されるという体験は先行研究では見当たらない。実習指導により社会から認められると感じるという体験は、小規模病院の実習指導者の特徴と考える。
②　初めて実習を受け入れる際の実習前、実習中、実習後の時期別の特徴
実習前は、【以前から実習を引き受けたかった】【実習指導を看護師の能力向上に活かしたい】【実習指導をとおして病院を学生や社会に知ってもらいたい】【実習指導をとおして自分たちの看護を学生に伝えたい】といった実習に対する前向きな気持ちと、【実習を受け入れ体制が十分でない】【実習指導の方法がわからず不安だ】といった実習に対するマイナスの気持ちがみられた。また【指導者以外のスタッフを対象とした研修】【看護以外の部署と調整する】と初めて実習を受け入れるために準備を進めていた。
実習中は、【実習の目的を達成させる指導を行う】【自分の看護観を伝える指導を行う】【学生

の能力に合わせた指導を行う】といった実習指導を行うこととともに、【学生を仲間として尊重】【指導者間の情報共有を工夫】【学生が関わる対象者への配慮】【指導体制の調整し必要時教員に相談】を行っていた。一方、【実習内容や指導方法を悩む】【指導と業務の両立が難しい】と感じていた。

初めて実習を受け入れた実習の終了後は、【指導者が成長した】【指導者以外のスタッフが成長した】【施設の機能を再認識した】【患者によい刺激となった】と実習指導を受け入れたことでの成果を感じる一方、【限られた指導者への負担】【指導能力不足を反省する】と感じていた。

看護学実習を受け入れている小規模病院は、初めて看護学実習を受け入れる実習開始前、実習中、実習終了後のいずれも、自施設にとってマイナスの面とプラスの面の両方を認識していた。実習を依頼する大学は、実習受け入れ前には小規模病院が実習を受け入れられるような体制づくりの支援、実習中は、小規模病院が日ごろから実施している地域包括ケアに関するありのままの看護実践を支持しつつ学生指導できるような支援、実習終了後は、実習指導者が認識した実習指導による成果や課題を病院管理者や看護管理者と共有することが必要と考える。

（２）小規模病院等における地域包括ケアに関する実習に対する看護系大学教員の認識

２大学２人に面接を実施した。

「あらゆる視点で見る力」として【対象者の疾患だけでなく生活そのものをみる】【対象者のこれまでの人生すべてから価値観を把握する】が挙げられた。「協働できる能力」として【コミュニケーションをとる】が、「発展的思考」として【対象者の未来を考える】が挙げられた。また、小規模病院における実習の課題の特徴として、実習指導者が学生指導と他の業務を兼務していることで学生の関わる時間が少ないことが挙げられた。

看護系大学生が卒業時に身につけてほしい地域包括ケアにおける能力である「あらゆる視点で見る力」「協働できる能力」「発展的思考」の３つの視点すべてを、小規模病院における地域包括ケアに関する実習で、学生が身につけることができていると大学教員は認識していた。小規模病院で地域包括ケアに関する実習では、学生が受け持たせていただく対象者はほぼ全員高齢者である。受け持ちをしている対象者を通して、その人が生きてきた場の文化や生活についてしっかり把握しその人が大切にしていることを分析することで、あらゆる視点で見る能力が身につくことができると教員は認識していた。地域包括ケアシステムは、対象者の生活を支えるために他職種が連携することが必須である。また、対象者を支えるためには、支援者同士が連携するだけでなく、支援する側と支援される側である対象者が協働する必要がある。支援される側である対象者を含めた関係者がお互いにコミュニケーションをとるという実践をすることで、学生は協働できる能力が身についていると教員は認識していた。実習で関わらせていただく対象者は高齢で様々な機能が低下している人が多い。しかし、その人はだから終わりではなく、これからその人の生活が豊かになる支援を行う。対象者がこの先どのような生活を送るかを考えることで、学生は発展的思考が身についていると教員は認識していた。

（３）小規模病院等における地域包括ケアに関する看護学実習モデル案

看護系大学教員は、卒業までに学生が身につけるべき地域包括ケアに関する「あらゆる視点で見る力」「協働できる能力」「発展的思考」という能力が、小規模病院における実習で獲得できると認識していた。また、小規模病院の実習指導者は、患者を尊重しながら、在宅医療や地域包括ケアに関するといった社会に求められている看護を実践しプロフェッショナルとしての姿勢を示していると考える。看護学実習は、多くの学生を一度に受け入れてもらえる規模の大きな施設で実習することが多い。しかし、今後は、実習施設として小規模病院を積極的に開拓すべきと考える。

小規模病院は、施設内に学生の居場所となる控室や更衣室の不足、実習指導の方法がわからないことによる不安、実習指導者が学生指導と他の業務を兼務しているので両立が難しいといった実習指導に関する負担を抱えている一方、自分たちの看護を学生に知ってほしい、学生を自分たちの仲間として尊重する、安心できる雰囲気の中で学生の気づきを引き出す、指導者を中心としながら看護師全体で協力する、指導者間の情報共有を工夫するといった、実習指導における強みをもっていた。このことから、地域包括ケアの視点の実習における看護学実習指導モデル案を検討した。

①実習を依頼する前に、大学は小規模病院の特徴や強みを確認する。大学の求める実習目標や実習内容と施設の特徴と一致しているかを判断する。

②大学は、小規模病院の実習指導者や看護管理者に実習に関する情報を丁寧に説明する。実習内容や実習方法はもとより、実習施設に通う交通機関や学生が安心した雰囲気で実習に臨めるよう更衣室や昼食をとる場所について双方で確認する。

③大学は小規模病院の強みを尊重し支持しながら、実習指導者と協働して実習指導をする。小規模病院の指導者は、自分たちの看護を、自分の仲間と考える学生に知ってほしいと強く思っている。また、実習指導の際は、患者の生活や健康に配慮しながら、患者と学生の双方を尊重している。さらに、自分たちの実習指導が大学に支持されていると感じることで安心し自信をもって実習指導を行っている。大学では、小規模病院のもつ看護実践における強みを尊重し、この強みが

学生に十分伝わるような働きかけを行う。
④実習指導において、大学と実習施設それぞれの責任と実習指導者の役割を明確にする。実習指導者は、大学の学生の実習指導という責任を認識しているが、大学から期待される指導責任を果たすことに不安を感じていた。実習指導者と大学教員それぞれが、何をどこまですることが役割なのかを具体的に確認し、指導者の役割で実習指導者に過度な役割負担とならないようにする。学生の教育に関することだけでなく、対象者の安全や権利を保障する視点を含めたそれぞれの役割を明確にする。
⑤大学と実習施設は、実習指導が小規模病院にもたらした成果を共有する。実習施設の実習指導や看護の質が向上することは、ひいては学生が質の高い実習指導を受けることとなる。大学は、学生の評価だけでなく、実習指導者や施設に対して丁寧にフィードバックする。

引用文献
1）吉田千鶴他：地域包括ケアにおける看護系大学生が卒業時に身につけてほしい能力に対する期待，帝京科学大学紀要，Vol.10，117-123，2014.
2）研究代表者　菅原京子：地元医療福祉の課題解決ができる地元ナースのコンピテンシーの構造化，挑戦的萌芽研究（15K15801），2015 年実施状況報告書
3）松崎奈々子他：地域での暮らしを見据えた看護に関する看護系大学 4 年生の興味・関心，群馬保健学紀要，Vol.36，2015.
4）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告　看護学実習ガイドライン．2020.
5）日本看護協会．2020 年病院看護実態報告書．日本看護協会調査研究報告．2021.　96.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 遠藤恵子，高橋直美，南雲美代子，菅原京子，安保寛明，沼澤さとみ	４．巻 27
２．論文標題 看護系大学の実習を受け入れた小規模病院の実習指導者の体験	５．発行年 2024年
３．雑誌名 山形保健医療研究	６．最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 遠藤恵子、高橋直美、南雲美代子、後藤順子、菅原京子、安保寛明、沼澤さとみ
２．発表標題 小規模病院における看護系大学の実習　受け入れ準備から実習成果まで
３．学会等名 第40回日本看護科学学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅原　京子 (Sugawara Kyoko) (40272851)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (21501)	
研究分担者	後藤　順子 (Goto Junko) (90310177)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (21501)	
研究分担者	高橋　直美 (Takahashi Naomi) (50525946)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・講師 (21501)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	沼澤　さとみ (Numazawa Satomi) (80299792)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (21501)	
研究分担者	安保　寛明 (Anbo Hiroaki) (00347189)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (21501)	
研究分担者	南雲　美代子 (Nagumo Miyoko) (70299783)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・准教授 (21501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関